

週刊

# うたごえ新聞

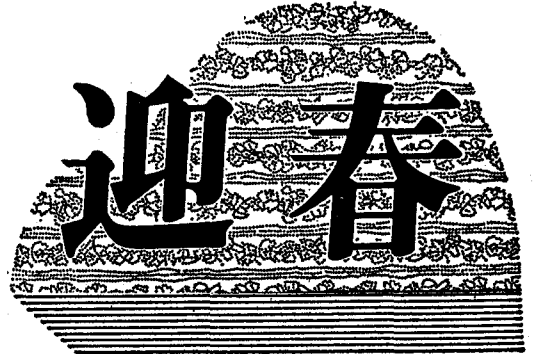
# 1 / 1.8

(1978年)

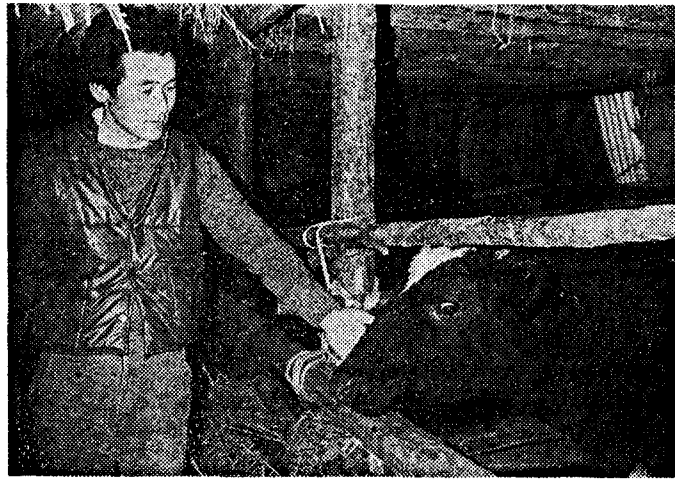
NO. 740

THE SINGING VOICE OF JAPAN

日本のうたごえ全国協議会機関紙  
発行 東京都新宿区大久保 2-16-36  
03 (209) 0638~9 うたごえ新聞社  
振替口座 東京2-5631 昭和34年1月31日  
第三種郵便物認可 毎週月曜日発行  
1部80円 (〒15円) ・月330円 (〒70円)



## 迎春



大都市に第二の故郷求め  
みた新春座談会と総評  
するある2人の活動家  
8面  
3面  
6面  
10面  
12面  
合唱発表会から  
スコミ界を予想  
年始の音楽会

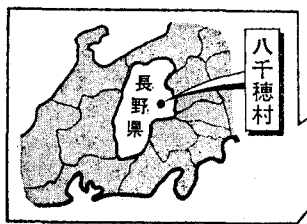
## うたごえロッジ"にかける若い農民夫婦

長野県南佐久郡八千穂村。  
長野駅から信越線・小諸駅で  
のりかえ、小海線に乗って約  
一時間、須田家は村でも一番  
高い標高千百メートルの山中

### 通信員訪問

長野県

## 須田さん一家

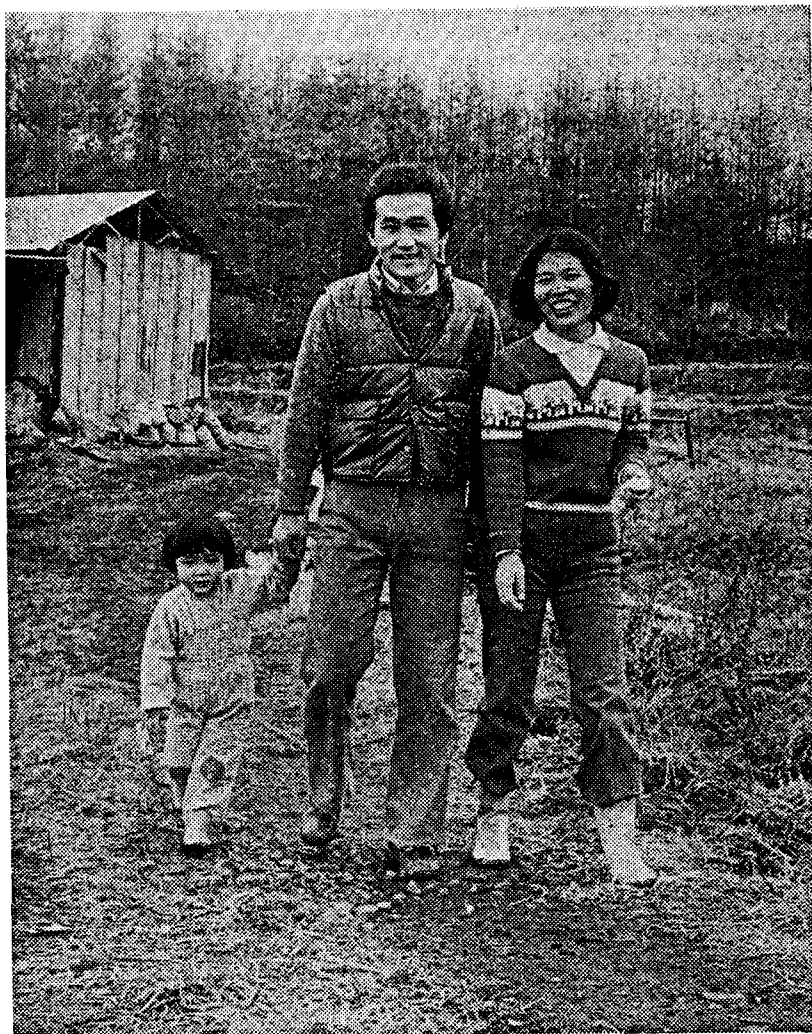


標高1100メートルの山腹にポツンとある須田さんの家は間もなく雪におおわれる、という。

にありました。  
新春にふさわしいうたごえ  
活動家を求めて、本紙編集部  
と地元、中村通信員による共  
同取材。そこで見たものは、  
人間が自然と一体となつて生  
活している須田一家と、二歳  
になる菜穂ちゃんをまじえた  
"うたごえ家族"でした。

おじいさんの代にこの村に  
住み、山を開拓し、今は五町  
歩の田畑を営む若き夫婦が、  
夜は十名足らずのサークルで  
も明るいコーラスを響かせて  
いるのです。その須田敬二、  
民恵夫婦の夢は、農業を何人  
かの人たちと共同でやること  
(彼らは農業コミュニケーションとい

う)と、山の一部を開拓して  
"うたごえロッジ"を造ること  
です。全国のサークルがい  
つでも使える、自然の中のロ  
ッジ、少しでも土のおい  
する中で明るい歌声合宿を、  
と夢はあかつきの空へ飛んで  
いきます。(記事2面へつづ



「第1の『原爆を許すま  
じ』を創つて思ったがで  
きなかつた。考えたらずこ  
もに戦争反対を教えるよ  
り、まず戦争とは何かを親  
子で話し合うことが必要  
と、あの『青い空は』がで  
きた」と作者の大西氏。  
★ ★ ★  
それと同じように、「沖  
繩を返せ」について創作  
されたのが「あかつきの空  
に」。同じ視点でなく、そ  
の延長でなくとて、同じ同  
じ目的に合った歌が生まれ  
る一例。  
★ ★ ★

今年も、沖縄返還運動の  
中から起された、あかつ  
きの大合唱、いわゆる元  
旦に御来光(ごらいこう)  
を見ながら決意を合唱で誓  
い合っただけが――。  
★ ★ ★

★ ★ ★  
この催しを知らない  
サークル無数、ここに運動  
の敷居が生じる。  
★ ★ ★

★ ★ ★  
新年から語り話はマッ、  
とついでに、私の故郷で  
は元旦に干柿を家族全員が  
一つずつ食べる。その種の  
偶数、奇数で吉凶を占う。  
熊本県球磨郡の伝説。  
★ ★ ★

★ ★ ★  
静岡県のある町では、大  
晦日から元旦にかけてタル  
マを青年団が配るそうだ。  
古い年の弱さを落し、新し  
い年に決起しようとの七転  
八起なのかな。  
★ ★ ★

★ ★ ★  
新しい歌づくりもそうだ  
が、今までの延長線上でな  
い思考と実践が飛躍の力キ  
か。  
★ ★ ★  
張りつめた  
風に似たりや  
わが心(未)

